

児童が好む英語の授業とそうでない授業の質的分析

猪井新一*

(2015年9月15日受理)

Qualitative Analysis of English Classes Which Primary School Students Like and Do Not Like

Shin'ichi INOI

キーワード: 小学校外国語活動, 授業の質的分析, 繰り返し練習, インタラクション

本研究は、児童が好む英語の授業の要因を、児童の英語の授業の好意度順位1位のクラスと順位32位のクラスの英語の授業を質的に比較分析することによって、明らかにしようとするものである。その結果、1) 繰り返し練習、2) インタラクション、3) 児童の積極性の3つの要因が浮かび上がった。繰り返し練習では、32位クラスでは機械的な単純な反復練習がほとんどであったが、1位クラスではチャンツを取り込んだ繰り返し練習が含まれていた。インタラクションは、2クラスにおいて、ALTと個々の児童の間および児童間で観察されたが、1位のクラスでは他の児童の発言をよく聞いて、反応することが伴われていた。児童の積極性については、普段から間違いを受け入れるようなクラスの雰囲気が必要であり、それにはHRTの学級経営が関与していると思われる。

はじめに

小学校外国語活動の授業において、児童はどのような授業を好み、どのような授業は嫌いなのだろうか。その要因には、さまざまな要素が関係していると思われる。例えば、外国語活動の授業は、日本人教師（多くの場合は学級担任）と外国人教師（ALT）とのティームティーチング（TT）で、実施されることが多いが、学級担任（HRT）が主指導者である場合の方が、児童は授業をより好むのだろうか、それともALTが主指導者の場合であろうか。あるいは、児童の英語の授業の好き嫌いは、主な指導者が誰であるかは、さほど重要ではないのだろうか。さらには、HRTが英語の教員免許を所有していた方が、所有していない場合より、児童は外国語活動の授業を好む傾向にあるのだろうか。このような疑問がいろいろわく。そこで、2013年11月～2014年2月にかけて、そして2014年9月に茨城県内の公立小学校8校、合計32の5、6年生のクラスを訪問し、授業

*茨城大学教育学部

参観をしビデオ録画するとともに、外国語活動に関するアンケート調査を児童・指導教師に対して実施した。児童のアンケートは5項目からなり、その1つに学校の英語の授業の好き嫌いに関するものがあり、4段階の尺度(4. とても好きである、3. まあまあ好きである、2. あまり好きでない、1. まったく好きでない)で回答してもらった(アンケートの詳細は資料を参照)。英語の授業の好き嫌い(好意度)に関するクラスの児童の平均値を算出すると、平均値の上位3クラスおよび下位3クラスは次の通りである。表1には、平均値の他に、学校、学年・クラス、人数、英語特区・非特区の別¹⁾、主指導、副指導、HRTの英語の教員免許所有の有無が示されている。

表1. 児童の英語の授業の好き嫌いに関する上位3クラスおよび下位3クラス

順位	平均値	学校*	学年・クラス	人数	特区・非特区の別	主指導	副指導	指導者の英語教員免許の有無
1位	3.64	E	6-1	28	非特区	ALT	HRT	無
2位	3.59	B	5-1	32	特区	HRT	ALT	有
3位	3.45	C	5-1	38	特区	ALT	JTE**	有
30位	2.80	H	6-4	30	特区	ALT	HRT	無
31位	2.60	A	6-1	30	非特区	ALT	HRT	無
32位	2.50	H	6-2	30	特区	ALT	HRT	有

(注) 上位3クラス(1位~3位)および下位3クラス(30位~32位)が同時に示されている。

*: 学校名はアルファベットにより示されている。

** : JTE (Japanese Teacher of English) は外国語活動担当日本人教師を示しており、このクラス(5-1)のHRTは英語の授業には関与していなかった。

児童の英語の授業の好き嫌いに関して、平均値の上位3クラスおよび下位3クラスに関し、特徴的なものを抽出しようとしてもかなり難しい。例えば、英語特区、非特区の要因によって、児童の英語授業の好き嫌いを説明することは容易ではない。順位1位のクラス(E校、6-1)は非特区にあるが、2位、3位のクラスの学校は特区にある。順位30位、32位のクラスは特区にあるが、一方31位のクラスは非特区にある。また、誰が主指導・副指導であるか、さらには、HRTの英語教員免許の有無によっても、児童の英語の授業の好き嫌いを説明しようとしても、困難である。順位1位のクラスはALTが主指導であるが、最下位のクラスもALTが主指導者である。順位2位のクラスはHRTが英語の教員免許所有者であるが、最下位のクラスも同様にHRTは英語の教員免許所有者である。このように、児童の英語の授業の好き嫌いを、アンケート調査や英語特区・非特区、主指導・副指導などの外的要因のみによって説明しようとするのは、調査の限界があることがわかる。そこで、本研究はビデオ録画した授業の分析を行うことによって、児童の英語の授業の好き嫌いを質的に研究しようとするものである。もちろん、指導者(ALT, HRT)、教材、カリキュラなど各々の学校で異なり、さらにはわずか1回参観した授業の分析のみで、児童の英語の授業の好き嫌いに関して、すべてを明らかにすることは無理である。したがって本研究では、児童の英語の授業

の好意度順位1位のクラスおよび順位32位のクラスの授業を比較分析することで、児童の英語の授業の好き嫌いを引き起こす要因をいくらかでも見つけようとするものである。

授業概要

1. 児童の英語の授業の好意度順位1位のクラス(E6-1)の授業概要(2014年2月○日授業参観)

E 小学校、6年1組の児童の英語の授業好意度の平均値は3.64である。4.0が「とても好きである」を示しているから、かなり高い平均値である。E校は英語非特区にあり、5年生から週1時間の外国語活動の授業を実施している。1年生～4年生は学期あたり数時間であり、年間多くても10時間程度である。ALTはアメリカ人で、業務委託型であり、HRTが児童の前に立つことはなく、さらには児童への日本語による指示も行っていなかった。いわゆるALTにはほぼお任せの外国語活動の授業である。教材は「Hi, friends 2」を使用していた。当日の授業は「Hi, friends 2」のLesson 8「夢宣言をしよう」を扱っており、以下のような授業展開がなされた。

E① ALTは、絵カードを用いながら、いろいろな職業(cabin attendant, farmer, dentist, vet, soccer player, artist, bus driver, etc.)を英語で発音し、児童全員がALTの後を繰り返す。その後、「I want to be a singer.」のように、「I want to be～」の構文を用いながら職業の名前を入れ替えてゆく。ALTの後を、児童が繰り返し練習をする。

E② ALTがある児童1人に、歌手の絵カードを示しながら、「What do you want to be～?」と聞くと、その児童が、「A singer」と答える。ALTはさらに、別な児童に同じ絵カードを示しながら、「My singer friend, what do you want to be?」と聞くと、児童は「I want to be a singer.」と答える。ALTは「Oh, OK.」と反応する。他の児童はこのやり取りを聞きながら、賞賛したり、拍手をしたりする。このようなQ&Aを、ALTは合計6人の児童1人1人とやりとりをする。

E③ 次に、ALTは児童個人ではなく、クラス全体に歌手の絵カードを示しながら、「My singer friends, together, please repeat. What, what, what do you want to be?」(下線部は強勢を置き、やや強調して発音する)とリズムカルに言い、児童は同じように繰り返す。今度はALTが絵カードを自分の胸元で左右に動かしながら、「A singer, a singer, a singer, a singer, a singer」と5回繰り返す。児童も同様に繰り返す。このようなALTとクラス全体のやり取りが、さらに3回繰り返される。

E④ ALTがHi, friends 2(教科書)のp. 40にある3人(Sakura, Taku, Alexy)のそれぞれについて、英語で紹介し、児童にメモをとらせる。ALTのSakuraのスピーチの紹介は次の通りである。
“Hello. My name is Suzuki Sakura. Suzuki Sakura. [Japanese is OK.] I want to be a vet. I like animals. [Animals are dogs, cats, monkeys, bears, chickens, animals.] I like cats. I have a white cat. I have a white cat. I want a dog. I want a hamster, too. I want to be a vet. Thank you. [One more time. Ready? Listen.] Hello, everyone. My name is Suzuki Sakura. I

want to be a vet. I like animals. I like cats very much. I have a white cat. I want a dog. I want a hamster, too. I want to be a vet. Thank you. [Are you OK?" One more time? One more? Yes? No? OK.]([]の部分は、ALT が説明をしたり、指示をしている部分)。ALT は1語1語をゆっくり、はっきり発音する。特に、文と文の間に長めのポーズを置く。残り2人(Taku, Alexy)についても同様に、ALT が英語のスピーチをゆっくり読む。児童は、教科書にメモを書きいれながら、ALT の英語を聞く。

E⑤ ALT が次のように児童に指示をする。“Today everyone will write a speech.(ワークシートを配布しながら) Easy. Japanese is OK. A picture is OK.”と言う。そして、以下のように板書をする。

1. Hello.
2. I want to be a _____.
3. I like _____.
4. Thank you.

ALT は児童にスピーチを準備するように指示をする。“Easy. OK. And you have 10 minutes. Pictures are OK. Pictures are OK. And I can help you.”その後、児童が各自でスピーチの準備に取り掛かる。HRT とALT は机間巡視をする。しばらくして、HRT とALT で職業カードを黒板に張っていく。5分程度経過したあたりから、スピーチ原稿ができた児童がALT にその原稿を見せる。児童の一人が「声優」を英語で何というかとALTに聞く。“Voice actor”とALTが答える。その後もALTは何人かの児童の質問に個別に答える。

E⑥ ALT は、“All right. Five, four, three, two, one, time. Now please get into your lunch groups.”とスピーチの準備の時間は終了し、班ごとにまとまるように指示をする。児童は机を移動し、4～5人の班を作る。ALT が “All right. Now in your lunch groups, please give your speech. OK?”と言うと、何人かの児童が “OK”と言う。ALT は黒板を指しながら、“Once again, please listen. Hello. I want to be a ～. I like ～. Thank you. OK?” 児童はそれぞれの班で自分のスピーチの発表を始める。

E⑦ ALT は “All right. Everyone, finished?”と言って、グループ内でのスピーチ発表が終了した児童に挙手をさせる。2/3 程度の児童が挙手をしたことを確認すると、次のように指示をする。“Next. Stand up. Give your speech to 10 friends. All right?” 児童は、男子同士、女子同士でスピーチを言い始める。

E⑧ しばらくして、児童を着席させた後、ALT が “Any volunteers?”と言って、児童2人を指さし、前に来るように促す。促された児童は、躊躇せず前が出る。もう1人の児童が自発的に挙手をして、前に出てくる。最初の児童は次のようなスピーチをする。

S1: Hello.(原稿は持っているが、見ないで、皆に手を挙げながら)(他の児童も “Hello”と言う。)
I want to be Tokyo Olympic. (ALT は “All right.” と言い、親指を上げる。)

やりたい。出たい。

I like sports. (他の児童、「オー」と反応する。)

Thank you.

ALTは“All right.”と言い、拍手をする。他の児童も拍手をする。S1は自分のスピーチの原稿をクラスの皆の前で掲げる。ALTはシールを1枚S1にあげながら“Nice”と言う。

2人目の児童が次のようにスピーチをする。

S2: Hello. (S1の時と同様に、他の児童も“Hello”と返す。その後、スピーチの残りは一気に言う。)

I want to be a baseball player.

I like baseball.

Thank you.

他の児童、拍手をする。「早い」といった発言も聞こえる。ALTがシールをS2に与える。

3人目の児童もスピーチを行い、他の児童が拍手をし、ALTからシールをもらう。

ALTが“Any more volunteers?”というと、さらに3人の児童が挙手をし、前へ出ていく。

5人目の児童のスピーチは次の通りである。

S5: Hello. (他の児童からの反応が何もないために、今度は大きな声で再度言う。)

Hello. (他の児童も、“Hello”と返す。)

I want to be firefighter.

I like cats.

Thank you.

他の児童が拍手を送る。

6人目の児童もスピーチをし、他の児童及びALTから拍手をもらう。そして、ALTからシールをもらう。最終的には6人の児童が自主的に教室の前に出て、スピーチをし、他の児童およびALTから拍手をもらうことになる。

E⑨ ALTが“Very good. Good job. Time over. Lesson 8, finished. Next, Momotaro. All right. See you.”と言って授業が終了する。

2. 児童の英語の授業の好意度順位 32位のクラス(H6-2)の授業の概要(2014年9月〇日授業参観)

このクラスの児童の英語の授業の好意度の平均値が2.50であり、順位1位のクラス(E6-1)の平均値からは1.0以上も下がる。3.0が英語の授業を「まあまあ好きである」ことを示しているから、このクラスの児童の平均値は、授業が好きとまでは達していないことがわかる。H校は英語特区にあり、年間の英語の授業時間数は50時間で、E校の35時間よりも1.4倍以上である。年間カリキュラムは市教育委員会が作成するが、具体的な学習指導案は各学年の外国語活動担当教員が作成する。教科書はHi, friendsを使用していないが、関連させながら年間カリキュラムが作成されている。ALT(アメリカ人)は市の直接雇用で

あり、E校のALT(業務委託)とは雇用形態は異なるが、授業はALTが主に展開していく点では、ほぼ同じである。HRTは主に、児童同士でインタビューゲームをする際の指示を日本語で行った。当日の授業概要は次の通りである。

- H① ALTが“How are you?”と挨拶をすると、児童が“I’m fine, thank you. And you?”と返す。その後、ALTが“Anyone happy?”“Anyone sleepy?”“Anyone hungry?”などと言いながら児童に挙手をさせていく。その後、“What day is it today?”“What’s the date today?”“What time is it?”と児童に発問をし、児童はクラス全体で答えていく。
- H② ALTが“Let’s do our rhyme.”と言って、マザーグースのある1節(2行分)を発音し、その意味について、ジェスチャーや日本語も入れながら、説明する。その後、その1節を児童に繰り返しをさせる。全体で繰り返してから、2列ごとに、繰り返させる。
- H③ ALTが“Today we are going to learn about places.”と言い、“The question is ‘where do you want to go?’”と言い、この表現を2回ほど繰り返し、児童にも繰り返しをさせる。その後、“Where, do, you”の単語を1語1語ずつ発音し、児童にもそのように発音させる。今度は、“Where do you”“Where do you want”“Where do you want to”のように、1語ずつ追加して、児童に繰り返させる。最後に再度、文全体を発音し、児童にも繰り返させる。そして、“In Japanese? Do you know? Someone?”と言って、児童に発問する。ある児童が何かをつぶやくと、ALTは「どこに行きたいですか」と言う。
- H④ ALTは“All right. Let’s learn about countries.”黒板に貼ってある、国旗の描いてある絵カードを指さしながら、“France, France, France”と繰り返し、児童にも自分の後を繰り返させる。“In Japanese?”と児童に聞く。児童は日本語で、「フランス」と答える。“Italy”“Germany”“South Korea”“America”“the United States”についても同様にする。ALTはさらに、“So other places.”と言って、黒板に貼ってある絵カードを指さしながら、“swimming pool”と言い、児童は繰り返す。“In Japanese”と言うと、児童は「プール」と答える。このようなやり取りをしながら他の単語“beach”“library”“park”“museum”“zoo”“Disneyland”“amusement park”の発音練習を繰り返す。
- H⑤ ALTが“Where do you want to go?”と言うと、児童も繰り返す。ALTが日本語で「答える」といながら“I want to go to~”と言うと、児童も同様に繰り返す。今度はALTが1語ずつ、“I”“want”と言うと児童も繰り返す。ALTがさらに“to go to”と言い、同じように児童も繰り返す。黒板にあるフランスの国旗の絵カードを指しながら、ALTは“I want to go to France.”と言うと、児童も繰り返す。ALTは“France”の代わりに、“Italy”“Germany”“South Korea”“America”“Brazil”を入れながら発音し、児童も繰り返す。次に、ALTは“the”をつけながら、“I want to go to the swimming pool”と言い、児童も繰り返す。さらに、“swimming pool”のところに、“beach”“amusement park”“Disneyland”等を入れ替えながら言い、児童は繰り返す。ALTが

“Anywhere else”「他に行きたいこと」と聞くと、児童は“Japan”「サイパン」「水星」「月」「太陽」「平等院鳳凰堂」「グアム」などの場所を挙げる。

H⑥ ALTはクラスを2つに分けながら、“Let’s practice. This side A, (残り半分の児童を指さしながら) B, A, where do you want to go? B, I want to go to France. Ready? One, two.”と言うと、クラスの半分の児童がそれぞれ、そのように繰り返す。“OK. Let’s switch.”とALTが言い、反対側の列の児童に“Where do you want to go?”と繰り返させ、残りの児童には“Germany”の国旗のカードを示し“I want to go to Germany.”と繰り返させる。ALTは“Let’s practice in pairs.”と言い、6列の児童をA,B,A,Bのように割り当てる。“Face each other.”と言う。HRTが「向かい合ってください」と言う。ALTは“A, where do you want to go? B, I want to go to~何でもいい。Ready?” ALTに促され、児童は“Where do you want to go?”とは言うが、その答えはあまり聞こえてこない。Bの列の何人かの児童は個人なりに、どこへ行きたいか考えている様子である。しばらくして、ALTが“Finished? Switch. Ready? One, two.”と言い、“Where do you want to go?”と児童に言わせる。その答えは、やはり英語ではあまり聞こえない。ほとんど日本語で雑談をしているような感じである。

H⑦ ALTが“Do you want to play a game? Let’s play a game.”と言うと、HRTがワークシートを児童に配布する。HRTが児童に筆記用具を準備するように指示をする。HRTは児童に次のように指示をする。「まず、名前を書いてください。その下に、僕の、私の行きたい所を書きましょう。日本語でもいい。全員立ちましょう。()に自分の行きたい所が書いたら腰を下ろしましょう。」続けて、「今からインタビューするけど、どこに行きたいですか、何と言いますか」と児童に聞くと、児童はコーラスで“Where do you want to go?”と答え、HRTはさらに、「～に行きたいですは」と言うと、児童は“I want to go to”と答える。HRTは「会話をしたら、サインをもらいましょう。立って。Stand up. はい、どうぞ」と児童に指示をする。児童は歩き回って、インタビューをしあう。ALT、HRTも同様に児童の間に入って質問をする。児童はインタビュー相手にワークシートを渡し、サインをもらう。

H⑧ ALTが“OK. Game over. Finished. Who has 10 people? 9? 8?”と言うと、4人の児童が挙手をし、前に出ていき、それぞれALTからシールをもらう。

分析および考察

児童の英語の授業の好意度順位1位のクラス(E6-1)と順位32位のクラス(H6-2)の授業の特徴を比較・分析を試みる。2クラスとも6年生児童のクラスで、ALTが主となって授業を展開している。ただ、E校のALTは業務委託型であるため、HRTの授業への関与は、見かけ上はほとんど見られない。したがって、授業中、HRTが児童全員に対して指示を出すことは全くない。一方H校では、ALTは市の直接雇用であるために、HRTは授業中、児童全体に向かって、必要と感じれば、適宜日本語で指示を出している。

2 クラスの授業内容の主な共通点は、以下の 4 点のようにまとめられる。

- 1) 絵カードを用いながら、指導する単語や目標文の練習をしている。
- 2) 単語および目標文(疑問文および答えの文)の繰り返し練習がある。
- 3) 目標文は、疑問文とその答えの文、各々1文ずつである。
- 4) 児童が自分のことを言う活動場面がある。E6-1 では班ごとに、あるいは他のクラスメートに、自分の将来になりたい職業についてスピーチをする。H6-2 では、自分の行きたい場所について、インタビューゲームを通して、クラスの友人と伝え合う。
- 5) ALT が褒美として、できた児童にシールを与えている。

2 クラスの授業中の活動内容や活動形態に関する主な相違点は、次の 2 点である。

- 1) 扱う単元内容が異なるため(E6-1は将来のなりた職業、H6-2では自分の行きたいところ)、当然扱う単語や目標文も異なっている。
- 2) 児童の主な活動形態が異なる。E6-1 では、個人個人がスピーチを作成し、そのスピーチを、まず各班内で発表し合い、さらに 10 人のクラスメートとスピーチを発表し合った。H6-2 では、児童はどこに行きたいかについて、列ごとのペア活動後に、クラスメート同士で、インタビューをしあった。

英語の授業についての児童の好意度順位 1 位クラスと 32 位クラスの違いを引き起こす要因は、各々の HRT の学級経営、児童と ALT との間の信頼関係を含めて様々あると思われるが、授業分析からは 1) 繰り返し練習、2) インタラクション、3) 児童の積極性の、少なくともの 3 つの要因が関係していると思われる。

1) 繰り返し練習

既に 2 クラスの共通点として上述したが、両方のクラスとも繰り返し練習をする。しかし、授業好意度順位 32 位のクラス H6-2 の繰り返し練習は、ALT の英語を、ただひたすら機械的に繰り返すことがほとんどである。H②の rhyme の練習、H③の目標文の練習、H④の国、場所の英語の練習は、ほとんどにおいて児童は ALT の後を単に反復している。また、H⑤にあるように、単語を入れ替えて答え方の練習をする際も、同様である。ALT が “France” のかわりに “Germany” を入れて “I want to go to Germany.” と言うと、児童は単にその英文を繰り返すだけである。H⑥では、列ごとに、“Where do you want to go?” と質問をする役と、“I want to go to ~” と答える役を割り振ってはいるが、ALT が言う英語を、児童は促されて機械的に繰り返しているに過ぎない。特に、質問に答える側の児童の声は徐々に小さくなっていった。このような単純な繰り返し練習が、H6-2 の英語の授業の顕著な特徴であると言える。以前中学校の英語の授業でよく行われたパターンプラクティスを想起させる。

授業好意度 1 位のクラス E6-1 でも E①のように、児童は ALT の発音する英語(様々な職業の名前と、それを “I want to be a ~” に入れる目標文)をただ繰り返す活動はあった。しかし、そのような機械的な反復練習だけではない。E③にあるように “What, what, what do you want to be?” “A singer, a singer, a singer, a singer, a singer, a singer” のように、ALT はチャンツを用いて、児童に繰り返し練習をさせた。児童はとても喜んでこの繰り返し練習に参加していた。一方 H6-2 では、単なる機械的な反復練習がほとんどであり、それも授業中の児童の活動のかなりの部分を占めていた。その結果として、H6-1 では徐々に児童

の声の繰り返す声が小さくなっていったが、E6-1 では楽しそうに児童が繰り返し練習をしていたこととに
関係しているのではないかと思われる。このような点に関して、金森(2011)も、教師や CD の後について
単にリピートさせるだけでは児童は飽きてしまい、何度も飽きずに取り組ませるための工夫が必要である
と述べ、その方法として、ある登場人物になりきって言うてみたりする、発音する速度を変える、リズムやメ
ロディーをつけ発音したりする方法などを提案している(pp.102~103)。E③のチャンツ練習は、まさに繰
り返し練習する際の変化をつける方法の 1 つである。

2) インタラクション

E6-1 では、E②のように ALT と児童個人とのやり取り(インタラクション)が見られた。ALT はわずか 6
人の児童ではあるが、児童 1 人 1 人に “What do you want to be?” と聞き、児童は “A singer” あるい
は “I want to be a singer.” と答えた。他の児童はそのやり取りを聞いて、「すごい」とか拍手しながら、
よく聞いて反応しているのである。ALT とのやり取りを成立させることができた児童は、達成感を感じ、さ
らに、クラスの仲間から賞賛されることで自信をつけていると感じられた。H6-2 クラスにおいても、H⑦の
児童同士のインタビューゲームの時に、ALT が教室の中を歩きまわりながら数名の児童 1 人 1 人に対し、
“Where do you want to go?” と聞いてはいるが、そのやり取りを他の児童が耳を傾け、反応することは
ほとんどなかった。ALT と児童個人個人がただ単にやり取りをするのではなく、E②に見られるように、その
やり取りを他の児童も聞いて、発言をしている児童に賞賛を送るようなクラスの雰囲気・態度が必要ではな
いかと思われる。特に H 校は、英語特区にあり、児童は 1 年生の時から、英語の授業で定期的に ALT と
ふれあっている。そのため、授業中、児童の ALT とのやり取りだけでは不十分で、E②のように、そのやり
取りに他の児童が耳を傾け、互いを認め合うようなクラスの雰囲気が必要なのではないかと考えられる。
そのためには、普段からの HRT の学級経営が深く関与しているように思われる。

E6-1 クラスにおいて、上述のようなインタラクションは ALT と児童との間にだけでなく、児童同士の
間にも見られた。E⑧における S1 児童のスピーチであるが、出だして “Hello” とクラスの皆に話しかけると、
聞き手側の他の児童も “Hello” と挨拶を返しているのがわかる。さらに、児童 S5 のスピーチの出だ
しであるが、“Hello” とクラスの皆に挨拶しても、何の応答がないので、S5 は再度、大きな声で “Hello”
と言って、クラスの皆が “Hello” と返すのを促したのである。他の児童もそれに応じて、“Hello” と挨拶を
返している。単純な挨拶のやり取りではあるが、普段からこのような児童同士のやり取りを意識した
授業が行われているのではないかと推測される。

E②のように、ALT と児童 1 人 1 人のやり取りを他の児童は良く聞いて反応していたが、スピーチにつ
いても、同様のことが言える。発表している児童のスピーチをよく聞いて、賞賛を与えたり、驚きの反応を
したりしている。E②のような他の児童の ALT とのやり取りや、E⑧のようなスピーチ発表でも、他の児童
はとてもよく聞いて、反応している。ある意味では、聞いている児童は、発表している児童へ「聞いている
よ」とのフィードバックを与え、その児童とインタラクションをしているということもできる。インタラクションは
相手のことをよく聞かないと成立しない。E6-2 では、他の児童の発言、発表をきちんと聞く態度が育てら
れていると思われる。もちろん、週 1 回の外国語活動のみで、そのような聞く態度が身につくわけではな
いから、ここでも HRT の学級経営と密接な関係があるのではないかと思われる。

太田(2013)は外国語活動ではインプットを中心としてインタラクションある活動の方が、繰り返しが多く
発話を求める活動よりも児童は好むと主張する。そのインプットとは、教師や他の児童が発言する英語で

あり、その意味(内容)を聞いて分かった、理解できたという、いわゆる“comprehensible input”のことであると述べている。E②のALTと個々の児童のやり取りやE⑧の児童のスピーチは、他の児童にとっては、太田(2013)の言うインプットになっている可能性が高い。そのようなインプットに基づいたインタラクションが外国語活動では大切ということになる。

3) 児童の積極性

E6-1 クラスでは、E⑧にあるように合計 6 人の児童が教室の前で、自発的にスピーチをした。扱っている単元内容がスピーチをすることであるが、6 人もの児童が自ら積極的に自分のスピーチをしようとする積極性は賞賛に値する。S1 児童の“I want be Tokyo Olympic”は英語としては正確ではないが、その思いをALTや他の児童が受け止めているのがわかる。さらに、最初の3人がスピーチを終了した後、新たに3人の児童が、まったくALTに促されることなく、自分の意志で挙手をし、スピーチを英語でしようとする態度は、外国語活動の目標となっている、コミュニケーションを図ろうとする積極的な態度そのものであり、「コミュニケーション能力の素地」(文部科学省, 2008)といえることができる。どのようにすると、このような態度が養われるかは、わずか1回の外国語活動の授業を分析しただけでは到底わからない。ただ、間違っても受け入れられるようなクラスの雰囲気があることは確かであり、上述したが、普段のHRTの学級経営と関わりがあるように思われる。H6-1の授業では、インタビューゲームの直後、授業終了のチャイムが鳴ったために、児童が自主的に発表する機会はなく、E6-1に見られたような児童の積極性については不明である。

結論

児童の英語の授業の好意度1位のクラスE6-1と32位のクラスH6-2の英語の授業を、質的に比較分析した。その結果、2つのクラスの英語の授業の好意度の差を引き起こすと思われる要因を、1)繰り返し練習、2)インタラクション、3)児童の積極性の3つの観点から分析を行った。繰り返し練習では、H6-2では、機械的な単純な反復練習がほとんどであったが、E6-1ではチャンツを含んだ繰り返し練習であった。E6-1で見られたインタラクションは、ALTと個々の児童、児童同士でみられたが、他の児童がそれをよく聞いて、反応するようなものである。H6-2でも、児童同士がインタビューゲームを通してインタラクションはしているが、どうもそれだけでは不十分であり、他の児童のやり取りにクラスで耳をよく傾け、反応することを伴ったインタラクションが必要だと思われる。児童の積極性については、普段から間違いを受け入れられるようなクラスの雰囲気が必要であり、それには、相手のことをよく聞くインタラクションにも必要なのだが、HRTのこのような集団を作ろうとする学級経営が深く関与していると思われる。

本研究において以上の3つの要因から授業を分析したが、それ以外の要因が関わっている可能性がある。とりわけ、各々クラスのHRTはどのような学級経営をしているかである。この点に関し、直接HRTに学級経営についてインタビューをしたり、英語以外の他の教科の授業で、HRTがどのような授業をし、そして、児童がどのような態度を示しているかなどを調査する必要がある。また、今回の調査では、2クラス、各々わずか1回のみ参観した授業を比較分析した。もっと分析対象のクラス数を増やし、同一クラスを複数回参観することなどが考えられる。今後、このような観点から総合的に、小学校外国語活動の授業の分析する必要と思われる。

謝辞

末尾になりましたが、本研究のアンケート調査および授業参観にご協力していただきました関係者の皆様方に、心より御礼申し上げます。また本研究は平成 24 年～27 年度科学研究費補助金助成事業(基盤研究(c) [24531099 代表: 猪井新一]から助成を受けております。

注

- 1) 英語特区では英語教育は小学校 1 年生から開始され、当時、低学年では 30 時間、中学年では 40 時間、高学年では 50 時間もの外国語活動の授業時間数が確保されていた。非特区では、学習指導要領の通り、5、6 年生がそれぞれ 35 時間の授業時数であった。1～4 年生は、各学期数時間程度とということであった。

引用文献

- 太田 洋 (2013) 「児童・生徒の意識調査と言語習得研究の観点による小中連携の授業」科学研究費事業(科学研究費補助金)研究成果報告書基盤研究(C) 22520634, https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2012/seika/C-19_1/32696/22520634seika.pdf (2015 年 9 月 10 日閲覧)
- 金森 強 (2011) 「小学校外国語活動成功させる 55 の秘訣—うまくいかないのには理由がある—」東京: 成美堂
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版
- 文部科学省 (2010) 『『英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査』について』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1299796.htm (2015 年 9 月 10 日閲覧)

資料

アンケート調査(児童用)

これは、皆さんの英語の学習についてのアンケート調査です。皆さんの学校の成績とはまったく関係ありません。ご協力をお願いいたします。

() 年 () 組 番号 ()

1. 1) 現在, 英語の教室(塾)へ行っていますか。 はい いいえ
「はい」と答えた場合、いつからですか。幼稚園または保育園 小学校 () 年生

2. 英語などの外国語は好きですか。

- 4) とても好きである 3) まあまあ好きである 2) あまり好きでない 1) まったく好きでない

3. 学校の英語の授業は好きですか。

- 4) とても好きである 3) まあまあ好きである 2) あまり好きでない 1) まったく好きでない

4. 英語の学習をもっとしたいですか。

- 4) とてもしたい 3) まあまあしたい 2) あまりしたくない 1) まったくしたくない

5. 次の活動(ア~キ)は、それぞれどれくらい自信をもって取り組むことができますか。それぞれあてはまる番号に○印をつけてください。

4 よくできる 3 だいたいできる 2 あまりできない 1 ぜんぜんできない

	4	3	2	1
ア) 英語であいさつをする。	4	3	2	1
イ) 英語の歌を歌う。	4	3	2	1
ウ) 英語で月、曜日、動物などの名前をいう。	4	3	2	1
エ) ゲームをする。	4	3	2	1
オ) ALT (外国人) の先生の話の内容がわかる。	4	3	2	1
カ) クラスメートと英語で会話やインタビューをする。	4	3	2	1
キ) みんなの前で、英語を話す。	4	3	2	1